

經濟論叢

第十四卷 第六號

故名譽教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学=社会科学的認識手段論の 問題点……………	大橋隆憲	1
資本主義の運動法則における 論理的なものと歴史的なもの(二)…	吉村達次	17
急速税務減価償却をめぐる 所得税会計の保守主義……………	高寺貞男	37
ヘンリ・ジョージについての考察…	北沢康男	55
ソースタイン・ヴェブレンに関する 一研究……………	中山大	68
神戸正雄先生による 再保険特約方式の輸入……………	佐波宣平	85
記事		
神戸先生御逝去……………		91
追憶文……………		96

新村出	井藤半弥	本庄栄治郎	小島昌太郎
石川興二	滝川虎三	大谷政敬	小山田小七
堀江保藏	島恭彦	松井清	

昭和三十四年十二月

京都大學經濟學會

神戸先生と私

島 恭彦

私が昭和九年に大学を卒業し、大学院に入学して、神戸先生の御指導を願いに最初に訪れたのは、現在の赤煉瓦の奥の先生の研究室だったと思う。その時先生はまずユーベルヒの教科書を読むべきこと、その後にはワグナー、シュタイン、シェフレ等の

ドイツ財政学の古典を読むべきことを教えられた。私の財政学研究の最初の道は、このようにまず先生によって与えられた。私としては、当時戦時経済に入りかけていた日本の公債問題に興味を感じ、公債論をまとめるようなこともやったが、ドイツの古典を二、三年かけて読んでいたのは、先生のこの示唆によったものである。

当時先生の研究室には訪問者のこしかける椅子がなかった。

なんでも後で聞いてみると、先生は研究室で訪問者がムダな長話をするのをとでもきらわれて、こういう風にされたのだという。結局これは先生が老後にも研究に精進されたことを物語っている。先生の生活は研究を中心にごわめて合理的にくみだてられていた。朝は浄土寺のお宅から朝日を背に研究室へ、夕は研究室から夕日をお宅へ足をはこばれる。そして朝から夕方までほとんどの時間は研究室での御研究に当てられる、夜

は家庭での団らんと休息、これが先生の日課だった。先生は私に研究上のことよりも、むしろこういう規則正しい合理的な生活態度を教えられた。先生は自分に与えられた仕事と家庭とを重んじる合理主義者、正しい意味での個人主義者だった。私がいまでも自分の研究生活を、普通の勤労者の生活のリズムにあわせようとしていること、家庭にはなるべく仕事をもちこまないで家庭生活に明けむように心がけているのは、神戸先生の生活態度からみならったものである。

しかし私は財政学の研究の上では、何時までも先生から与えられた道を守っているわけにはいかなかった。私がドイツ財政学の伝統から離れていったのは、一つはドイツ財政学そのものの性格と、他は当時の日本の情勢に由来するものであった。十九世紀のドイツ財政学はドイツ的ではあるが、イギリス、フランスの経済、社会思想をたくさん取り入れている。とくに私がロレンツ・フォン・シュタインの「フランス社会主義運動史」などという財政学とあまり関係のない書物を読んだときに、ドイツ財政学と決別する決意をかためてしまったのである。また私達には当時大学の中でも戦争の重苦しい空気がヒシヒシ感じられた。こういう空気に対する抵抗を現在の学生のように行動にあらわすことはできない、なんとかしてドイツ財政学の妥協的、官僚主義的なワタを破ろうという私の気持が、私をイギリス、フランスの古典へとひきつけてしまったのである。私のこ

の当時のあせりは私の書いた論文にあらわれて、論旨を支離滅裂にしていたのであろう。私の原稿は何度神戸先生のところへ持っていくても、先生からよしと云われたことはなかった。ある時は「自分にはよくわからないから、中川（与之助）先生に一度みてもらったらどうか」ともいわれた。この時はいよいよ先生から見限られたと思い、自分の能力にすっかり自信をうしなつたものである。こういうことをくりかえして、大学卒業以来五年目にまとめたものが、ドイツ財政学批判の上にたつ「近世租税思想史」である。私はいまでも先生がどのようにこの私の書物を評価されていたか気がかりである。

私が和歌山高商に勤めていた数年間は、大平洋戦争の時期で、先生との交渉はほとんどなかった。京大人文科学研究所に職を得て一年後、戦争が終つてから、私は久しぶりで浄土寺のお宅に先生を訪ねた。先生はすでに比島の戦で御子息（神戸正一氏）をなくされていた。この時ほど私は先生にあたたかく迎えられ、しみじみとお話をしたことはなかった。先生は、日本は突にバカな戦争をしたものだといわれ、こんな戦争を二度とくりかえさないようにするのが、君達若い者の責任だということ云われ、自分なりに晩年をそのためにつくそうともいわれた。今から考えてみると京都市長から、地方行政調査委員会議の議長へと日本民主化政策のコースをあゆまれた先生には、先生なりのお考えがあつたのかもしれない。

晩年の先生は御不幸つぎであつた。今でも先夫人をなくされた時の先生の姿は忘れられない。先生自ら喪主をつとめられ、聖書をもって、東山の火葬場まで棺の側につきそつて行かれた。私にはその時棺の前にさされた小さな白い花が印象的だつた。それは神戸先生の家庭ならではできない家庭葬ともいふべきものであつた。

先生はこの頃アパートに住みたい、洋食の方が口に合うようになった、というようなことを時々もらされていた。私はおよそ普通の老人と正反対の趣味だと不思議に思っていたのだが、考えてみれば最愛のものをうしなわれ、長い間の合理生活を身につけられた先生には、このような生活が好ましく思われたのかもしれない。そして私は本当にその後河原町の一角のアパートのようなお宅に、毎年正月に一度老父をたずねるように、先生を訪問することになった。こういう時に必ず先生は、まず亡き御子息の齢を数えられるように、君は今年いくつになつたかとたづねられるのが常だつた。勝手な憶測だが、あるいは先生は私を通じて御子息の倂をみておられたのかもしれない。神戸正一さんは私と同期の東大卒業であり、私と全く同様ドイツ財政学の研究に進まれた。ワグナーやシュタインの精力的な研究を発表され、私は敬意をもってこれを見、度々披刷や手紙を交換しあつた。私の「近世租税思想史」についても懇切な批判をいただいた。私はこの著書をもってドイツ財政学から離れてい

ったのだが、神戸正一さんはどのようにドイツ財政学を展開されるか、それが私のその頃の関心の中心だった。正一さんを戦争でうしなわれた先生の御悲嘆とくらぶべくもないが、私も好敵手をうしなつたという嘆きで、日本の学界に大きな空白を感じていたのである。

先生の研究意欲は最後までおとろえなかつたようである。地方行政調査委員会議の議長を退かれた後、私も丁度地方財政や町村合併の研究に進んでいた頃で、委員会議の勧告した町村合併の構想について、くわしいお話をうかがい、大いに参考になつたことを記憶している。その直後先生から「財政学講義」を贈られ、先生の研究意欲のさかんなことにおどろいたものである。その「自序」の中に次のような言葉がある。「財政学は私の愛児である。私が学問の上でのあと目まで継がそうとしていた子どもを亡くしてからは、財政学だけが私の子どもとして残つておる。……」

今から思うと、この八月に経済学部同窓会雑誌の「同好」の題字を先生のお宅へいただきにいったのが、元気な先生にお目にかかれた最後の機会であつた。私は九月十四日スペインでの国際財政学会へ出席のため、先生の御病氣も知らず羽田をたつた。パルセロナの会場で、先生の学友、そしていまでは西ドイツ財政学界の長老ノイマルク教授にあい、話のあとで、「プロフェッサー・カンベは元気か」という問いに、私は「今でも京

都で元気に暮しておられます」と答えてしまった。私の心の中に先生はたしかに元気で生きておられたので、羽田で日本の土をふんだ直後、先生の御他界のことを知らされた私のおどろきは形容のできないものであつた。